

短大生と高校生の「交流作文」における一形態 —クラウド上で行う「交流メール」の可能性—

A form of "message exchange" between junior college students and high school students
—Possibilities of cloud-based "exchange email" activities—

山田 範子 (金沢星稜大学女子短期大学部准教授)
Noriko YAMADA (Kanazawa Seiryu University Women's Junior College, Associate Professor)

〈要旨〉

「交流作文」とは、町田 (2009) が考案した双方向型の作文指導法である。町田に学び、拙稿 (2023) では、短大生と中学生の実践を通して、交流作文は双方の学習者に価値ある学びをもたらすことを明らかにした。

メールの書き方は高等学校国語科で扱われるが、教科書を読むだけの学習にとどまりがちである。しかし、大学生および社会人になるとメールを頻繁に使用することから、高校時代に実践的に学ぶ必要がある。そこで、交流作文を「交流メール」に発展させ、高校生が書いたメールの文章をクラウド上で短大生が添削・編集するなどして交流する授業を行った。

本研究では、交流メールを通して、学習者にどのような学びがあるか明らかにすることを目的とした。研究の結果、交流メールは、高校生にはメールの形式的な書き方の習得と表現の適否に関する意識強化をもたらすことが明らかになった。短大生は、表現の適否という微妙な領域での判別の能力を磨く能力を向上させたことが明らかになった。

〈キーワード〉

高等学校国語科, 電子メール, ICT, テキストマイニング, 言語感覚

1 研究の背景

筆者はかつて、町田 (2009) が考案した「交流作文⁽¹⁾」を、短大生と中学生を対象とした授業に拡大し、考察を加えたことがある。すなわち、山田 (2023) は「短大生は、相手がどのように受け止めるか考えて言葉を選ぶこと、自分の文章や文章作成技術を振り返ること⁽²⁾」, 「中学生は、短大生の優しさや熱意を読み取ることによって、作文を書くことや文章作成技術を学びたい意欲が強くなり、分散的ではあるが文章作成技術全般の力を付けること⁽³⁾」ができたと報告し、それぞれの「学習者に学びをもたらすこと⁽⁴⁾」が国語教育における交流作文の価値であることを明らかにした。また、このような成果の背景には「双方向性・匿名性・新規性が作用していた⁽⁵⁾」と述べた。

双方向性の作用には、中学生が書いた作文に対して短大生が添削したことも含まれるが、質問コーナーを設け、中学生の素朴な質問 (「短大に入って良かったことは?」など) に対して、短大生から返答があったことが大きく関係

している。これによってお互いの心理的距離が近くなり、意欲向上につながった。ペンネームを使うことによる匿名性やこれまで経験したことのない授業という新規性も良い影響をもたらした。

このように、楽しみながらお互いの学びを高め合った交流作文の実践であったが、中学生が身につけた能力が多岐にわたり、分散的になってしまったことが課題として残った。先行研究によって明らかになった有効性を維持しながらも、添削を受ける側が確実に力を付けることができる交流作文の授業開発が必要である。

2 実用文としての電子メール指導

2-1 実用文指導の要点

本研究にご協力いただいたのは、山田 (2023) 同様、川井有紀教諭である。川井教諭が星稜中学校から星稜高等学校に異動し、3年生の国語科担当になったことから、川井教諭のクラスの生徒35名と、筆者が担当する「日本語表現

法Ⅱ」を履修する短大生29名を対象に、新しい交流作文の授業を構想した。

まず、添削を受ける側の学習者（高校3年生）にとって、必要かつ具体的な学びとはどのようなものか検討した。平成30年告示の高等学校学習指導要領国語編では、「実社会」とのつながりが重要視され、規約や契約書などを実用文として捉え、国語科においてこれらを扱うこととなった⁶⁾。砂川（2021）は、「国語で実社会に対応するための教材を用意するなら、特定の状況からのみ一義的に意味の決められる教材では十分ではない⁷⁾」「異なる状況にいる者同士がどうやって意味をすり合わせていくのかなどが指導の中身として考えられる必要がある⁸⁾」と指摘し、規約や契約書の情報を過不足なく把握することからさらに踏み込み、「実用文による教育の可能性をより具体的に明らかにする必要があるだろう⁹⁾」と述べた。

他方で、筆者の問題意識の中に、学生から受け取る電子メール（以下、メールと記載）の違和感があった。誰もがほとんど同じ文面である。現代では一般的に使われていないと思われる仰々しい表現もあり、18才～20才の短大生が自ら考えて書くメールとは思えなかった。そこで、短大1年のある学生にインタビューしてみたところ、「メールの書き方を高校までに教わったことがなかったので、短大に入学して初めてメールを書かなければならない状況になったとき、どのように書けばよいかかわからず、ネット検索して、その例文のとおり書いた」と答えてくれた。

以上のことから、大学入学を控えた高校3年生に必要な具体的な学びとして、実用文としてのメール書き方があると考えた。同時に、一義的なメールの書き方を教えるのではなく、メールの書き手と受け手という異なる立場・状況にいる者同士がどのように意味をすり合わせていけるか考察できる授業を開発しなければならない。

2-2 交流作文から交流メールへ

高校3年生が必要感を持って取り組めるように、現実起こりそうな状況を想定し「志望する大学に入試に関する書類を取り寄せたところ、入学者選抜要項の3ページ目だけが抜けていました。大学の入学課あてに、これについて問い合わせ、再送をお願いするメールを書いてください」という課題を設定した。短大生には、大学の入学課職員になったつもりで、メールの文章として正しいかどうかに加え、職員として高校生からのメールをどのように受け止めたかを重視して添削するよう指示することにした。

高校生は添削を通して、メールの受け手を意識することができる。短大生は、普段は学生として接している大学職員の立場になってみることで、他者に思いを致し、自分を客観的に見ることもできるだろう。このように、本研究で

設定したメール課題を通して、短大生・高校生ともに、異なる立場・状況にいる者同士が意味のすり合わせを行えることになる。

当初、山田（2023）で行った交流作文と同様に短大生がWordファイルでワークシートを作成し、そのワークシートにメールの文章を書く欄を設け、高校生に書き込んでもらおうとしていた。しかし、星稜高等学校で使用しているタブレットのアプリの関係で、生徒が書き込もうとするとWordではない形式になってしまうことが判明した。問題が発生したことで、より現実に近づけようと実際のメールでやりとりすることができないか模索したが、短大生は大学（短大部）から個別のメールアドレスが付与されているが、高校生にはメールアドレスが付与されていないため、不可能だった。そこで、短大生に付与されているMicrosoft 365¹⁰⁾を活用し、短大生が作成したWordファイルをクラウドに保存し、高校生が共有されたファイルをクラウド上で閲覧・編集することで、メールの文章を書き込むことにした。このようなやりとりを本研究において「交流メール」と名付けた。

3 本研究の目的

本研究の目的は、金沢星稜大学女子短期大学部の学生がクラウド上で星稜高等学校3年生のメールの文章を添削することを中心とした交流メールを通して、それぞれの学習者にどのような学びがあるか明らかにすることである。

4 研究方法

4-1 研究の手順および分析方法

本研究は以下の手順で行う。主な分析は、アンケート項目ごとに回答を分類する方法と、学習者の感想をテキストマイニング¹¹⁾する方法によるものとした。

- ① 短大生（「日本語表現法Ⅱ」履修者）と高校3年生（川井教諭担当クラス）を対象に、交流メールの授業を実施する。
- ② 授業において、短大生が作成しクラウド上に保存した共有ファイルに、高校生がどのようなメールを書き、短大生がどのように添削する傾向があるか、無作為に抽出したペアのワークシートを中心に明らかにする。
- ③ 共有ファイルの「質問コーナー」でどのようなやりとりがあったか、無作為に抽出した5例を確認する。
- ④ それぞれの学習者を対象に行った授業後アンケートの各項目の回答を分類する。
- ⑤ それぞれの学習者が書いた授業の感想を、テキストマイニングを用いて分析する。
- ⑥ 本研究によって得られた学習者の反応を総括して考察し、交流メールを通して、それぞれの学習者にどのよ

うな学びがあるか明らかにする。その際、特に添削を受ける側の学習者（高校生）の学びに注意して考察する。

4-2 授業の実際

交流メールの授業は、短大部では選択教養科目「日本語表現法Ⅱ」（授業時間90分）の連続した3コマで実践した。高校は国語科の授業中に取り組んだ。短大・高校ともに複数回にわたって行ったため、欠席者がいる場合は、課題として後日提出してもらうなどして調整した。

短大の2回目および3回目授業は、授業時間を部分的に使用した。枠内に短大生の言語活動を示す。

<第1回> 90分

- (1)交流メールの趣旨と高校生に与えるメール課題を理解する。
- (2)高等学校国語科教科書（東京書籍「現代の国語」令和四年発行）に記載されているメールの書き方の例を確認する。
- (3)メールの書き方として高校生が学ぶべき項目を理解し、添削の観点を設定する。
- (4)山田（2023）のワークシートの例を見て、Wordでワークシートを作成する。

金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部では、2021年度入学者以降、全学生にタブレットを貸与している。短大生がタブレットで、先述のMicrosoft 365に含まれるWordを用い、本物に近いメール欄や質問コーナーを設けたワークシートを作成した。匿名での交流にするため、ペンネームを使用した。

<第2回> 約30分

- (1)Microsoft 365のOneDrive¹²⁾にログインして、ファイルのアップロード方法と共有ファイルの作り方を学ぶ。
- (2)各自、Wordで作成したワークシートをOneDriveにアップロードする。
- (3)すべてのユーザーが共有できる設定にした共有ファイルを作成し、リンクを筆者（担当教員）に送る。

後述のアンケート結果でも明らかになるが、短大生は共有ファイルを作成した経験に乏しかった。この機会に共有ファイルの作り方を教えたところ、多くの学生がすぐに理解することができた。高校生が編集できるように、編集権限を「すべてのユーザー」にするよう指示したが、数名の学生がこの操作を忘れ、個別にメール連絡して設定を変更するよう促さなければならなかった。この程度の問題が発生しただけで、おおむねスムーズに共有ファイルを作るこ

とができた。短大生が作成した共有ファイルのリンクを一覧表にして筆者から川井教諭に伝え、川井教諭が高校生に配信した。

<第3回> 約40分

- (1)各自、OneDriveにログインし、高校生の書き込みを確認する。
- (2)正確さを担保するため、ペアになって意見交換しながら高校生が書いたメールを添削し、質問への返事を入力する。
- (3)授業後アンケートに答える。

基本的に短大生と高校生がペアになって交流したが、人数に差があったため、1対2で対応する場合もあった。ペアは川井教諭に無作為に割り振ってもらった。メール添削は、短大生がペアになり、相談しながら進めた。

授業の最後に、筆者がGoogleフォームで作成したアンケートを短大生に配信した。高校生用に作成した授業後アンケートは川井教諭に配信をお願いした。

5 結果

5-1 クラウド上での共有ファイル添削

【図1】は、短大生（ペンネーム「ピンクマン」）が作成したワークシートに高校生A¹³⁾が書き込んだメールの文章の抜粋である。無作為に抽出したこのペアを中心に、短大生と高校生のメール添削の実際を報告する。なお、メールの課題は「志望する大学（金沢星空大学）に入試に関する書類を取り寄せたところ、入学者選抜要項の3ページ目だけが抜けていました。大学の入学課あてに、これについて問い合わせ、再送をお願いするメールを書いてください」である。

件名 入試に関する書類の再送

金沢星空大学 入学課 御中
大変お世話になっております。
先日、貴学の入試に関する書類を取り寄せたところ、入学者選抜要項の3ページ目が抜けておりました。そのため、金沢星空大学の入試に関する書類の再送をしていただくご連絡致しました。

お忙しい中、申し訳ございませんが下記の住所に本日より2週間以内に到着するよう、早急な対応をよろしくお願い致します。

【図1】高校生Aが書いたメール

短大生は、以下のコメントを書き加えるなど、添削を行った。数字と下線および補足説明は筆者が付け加えた。

・（件名は）「再送」を文の最後にすると①強い感じ・上か

ら目線感が出るから注意！

- ・（「金沢星空大学入学課御中」の後に）②一行あける。
（「大変お世話になっております」の文の後に）③名前を絶対名乗ること！！
- ・（「再送をしていただく」に対して）再送をしていただきたく、が正解？最上級丁寧にするなら、「④差し支えなければ書類の再送をお願いしたいためにご連絡させていただきました」とか！
- ・全体的に丁寧な文章を書けていて⑤すごくいい感じ！その調子！赤文字のところを直せると100点！！

①強い感じ・上から目線感が出る、④差し支えなければというコメントより、この短大生（ピンクマン）は大学の入学課職員の立場でメールを受け取ったときに違和感があったと考えられる。入学者選抜要項の3ページ目が抜けるミスがあったことは事実であり、大学側は当然再送しなければならない状況ではあるが、それを非難するような書き方は避けるべきだと考えたのであろう。

例に挙げた高校生A以外にも、メールの件名に「入学者選抜要項の不備」と書く生徒が多数いたが、それに対して多くの短大生が「不備という言葉は使わない方が良い」と添削していた。一般的なメールの書き方からすれば、件名は一目で用件がわかることが必須であり、その意味では高校生の表現は正しいと言える。しかし、大学職員の立場で受け取った短大生は、正しさよりもメールの受け手の気持ちに配慮することを優先した添削を行った。

ピンクマンは指摘していないが、高校生Aの書いた最後の文にある「早急な対応をよろしくお願い致します」も気になる表現である。短大生の中には、高校生Aと同様の「早急な対応」というような表現を、ピンクマンの言うところの①強い感じ・上から目線感が出る^①と考える者があり、「相手を責めるようなニュアンスになってしまう可能性があるので、別の言いの方が良いと思います」「メールを受けとった相手があまりいい気持ちにならないかも」などとコメントした。

④差し支えなければという表現は、メールの受け手の立場や状況を思いやり、メールの書き手の要求を明らかにしつつも譲歩して受け手に決断に委ねるものである。他にも「恐れ入りますが」「お手数おかけいたしますが」という言葉を添えるようアドバイスした短大生がいた。このようなビジネスメール特有の言い回しは、おそらく高校生には馴染みがないため、丁寧に書きたいと思う気持ちがあってもなかなか思いつかないだろう。社会生活を見越した短大の授業や就職活動などを通して実社会とつながったメールのやりとりを経験してきた短大生だからこそ、高校生にアドバイスできたと考えられる。このように、短大生は、

表現の適否の観点で添削する傾向があった。【表1】に短大生が適否の観点で指摘した高校生のメールの文をまとめた^④。

【表1】短大生が適否の観点で指摘した高校生のメール文

高校生が書いたメール文	
件名	・入学者選抜要項の不備（について） ・入学者選抜要項の資料の不足について
本文	・入学者選抜要項の書類の3ページ目だけが抜けている不備がありました。 ・二週間以内に必着するよう～ ・速やかに配達をお願いします。 ・至急再送お願いいたします。 ・速達でお願いいたします。

一方、②一行あける、（初めてのの人にメールする際には）③名前を絶対名乗るは、形式的な指摘であり、これらは国語科教科書にも掲載されている。高校生の2人以上のメールに出現した形式的なミスとそれに対する短大生の指導を【表2】に示した^⑤。短大生はこのような形式的なミスにおおむね気づき、正しく修正することができた。必修科目の「日本語表現法Ⅰ^⑥」の学習成果の表れの一つとって良いのではないだろうか。

【表2】高校生の形式的なミスと短大生の指導

高校生のミス	短大生のコメント
件名なし・具体性のない件名 宛名なし 自己紹介なし 改行なし	・件名ないと見落とされるかもしれない。 ・何の問い合わせなのか、もう少し具体的に書きましょう。 ・最初は宛名を書きましょう。 ・挨拶して名乗りましょう。 ・（段落を作る場合は）一文字あける。 （文頭をそろえる場合は）一行あける。
入学課様	様は個人に対しての敬称だよ。「御中」を使います。
文頭の「なので」	話し言葉なので×

短大生が高校生にコメントした事項は全部で42箇所あり、そのうちの14箇所が表現の適否に関する指摘であった。メールに不慣れな高校生が多かったため形式的指摘が多いが、その点を考慮すると、短大生はメールの文章としての正誤に加え、メールの受け手の立場で添削をすることができたと言える。

最終的に筆者が共有ファイルを確認し、正しく添削できていない点については川井教諭に連絡し、高校生に訂正をお願いした。教員側で訂正したのは、短大生が「させてい

ただく」を誤って二重敬語とした点と「メールでは段落を付けない」と限定的な指導をした点の2点のみだった。

ピンクマンが⑤すごくいい感じ！その調子！赤文字のところを直せると100点！！と書いているように、どの短大生も高校生に学びがあるように熱意を込めてメールを添削し、ミスの指摘にとどまらず、全体を総括して温かい励ましの言葉を送った。

5-2 質問コーナーの高校生の質問と短大生の回答

質問コーナーにおける高校生の質問とそれに対する短大生の回答を無作為に5例抽出し、以下に示す。ペンネームを使うことによる匿名性により、高校生は素朴な質問を短大生に投げかけた。短大生はそれに対して率直・誠実に答えている。お互いの心理的距離が近くなっていることが窺える。

<ふおくしにー (短大生)・黒蜜きな子 (高校生) ペア>

Q: 大学で楽しいと思うことはなんですか？

A: 空きコマの時間に、友達とコンビニに行ってアイスを買って食べたり、写真を撮ったり、何気ない会話をすることがとても楽しいです。流星祭¹⁷などのイベントもとても楽しいですよ！

<りんごちゃん (短大生)・ほうじ茶 (高校生) ペア>

Q: どんなバイトをしていますか？

A: 焼肉屋さんとホテルの掃除です。

<げんまりゆ (短大生)・白タマ子 (高校生) ペア>

Q: 好きな食べ物はなんですか？

A: 好きな食べ物は、パスタと寿司です！

<あったかいそば (短大生)・のんたん (高校生) ペア>

Q: 大学生活で楽しいことと辛いことを教えてください。

A: 楽しいことは流星祭など盛り上がる行事があることです。辛いことは、資格などを取得しないといけないことです。

<あおりんご (短大生)・白い抹茶 (高校生) ペア>

Q: 生徒会執行部はありますか？

A: 生徒会執行部はないです (泣) ですが、たくさんのサークルや部活があります！！

5-3 高校生の授業後アンケート

高校生に対して行った授業後アンケートの結果を項目ごとに以下に示す。なお、回答者数は27名である。

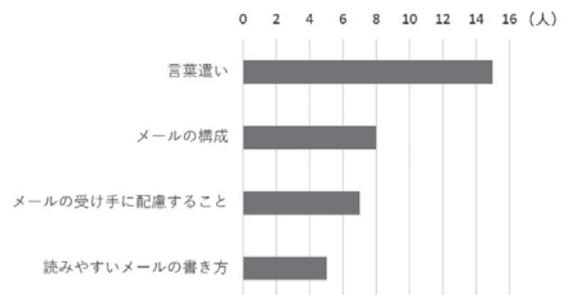
①交流メールの授業までに、問い合わせや依頼の電子メールを実際に書いて送信したことはありますか？

「ある」と答えたのが3名、「ない」と答えたのが24名だった。高校3年生は、実際にメールを送った経験がほとんどないことが明らかになった。また、「ある」と答えた3名に「そのメールを送ったのはいつですか？」と尋ねたところ、2名が高校3年生、1名が高校2年生と答えた。

②短大生の添削 (メールの書き方へのアドバイス) から学ぶことはありましたか？「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた人にお尋ねします。学んだことを思いつく限り、具体的に書いてください。

「そう思う」が16名、「だいたいそう思う」が9名であり、約93%の高校生が短大生の添削に学びがあったと回答した。「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した高校生は、それぞれ1名だった。

「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した25名に対して、「学んだことを思いつく限り、具体的に書いてください」と依頼した。その回答を内容ごとに分類し (複数回答あり)、【図2】に示した。



【図2】 交流メールでの学び (高校生)

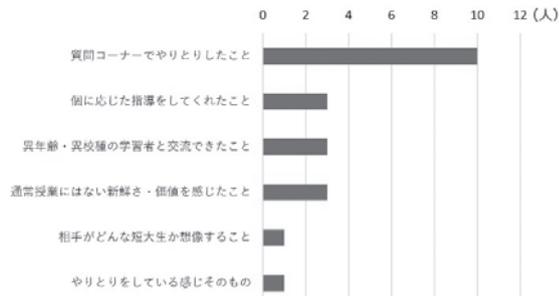
③交流メールをやってみて、メールの書き方に対する自信が増えましたか？

「そう思う」が5名、「だいたいそう思う」が18名、「あまりそう思わない」が4名という結果だった。「だいたいそう思う」と答えた高校生が最も多く、交流メールを複数回繰り返すなど、さらに自信を強める授業展開の工夫が必要であることが示唆された。

④交流メールは楽しかったですか？「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた人にお尋ねします。特に楽しかったことはどのようなことですか？

「そう思う」が16名、「だいたいそう思う」が6名、「あまりそう思わない」が5名だった。80%以上の生徒が交流メールの授業に楽しく参加できたことが明らかになった。

特に楽しかったこととして高校生が挙げた回答を内容ごとに分類し（複数回答あり）、【図3】に示した。圧倒的に「質問コーナーのやりとり」を挙げた高校生が多かった。



【図3】 交流メールで特に楽しかったこと（高校生）

⑤交流メールの授業をまたやってみたいですか？

27名全員が「またやってみたい」と回答した。質問②で「あまりそう思わない」「そう思わない」、質問④で「あまりそう思わない」と回答した生徒も、交流メールの授業はまたやってみたいと判断したことが明らかになった。

5-4 短大生の授業後アンケート

短大生に対して行った授業後アンケートの結果を項目ごとに以下に示す。なお、回答者数は26名である。

①問い合わせや依頼の電子メールをはじめて送った時期はいつですか？

中学校以下の時が0名、高校1年生の時が1名、高校2年生の時が0名、高校3年生の時が7名、短大に入学してからが18名であった。本研究の範囲では、大多数が短大に入学するまでメールを送信したことがないということが明らかになった。

②今回の授業を経験する前、自分の電子メールの書き方に自信がありましたか？

「そう思う」が1名、「だいたいそう思う」が3名、「あまりそう思わない」が14名、「そう思わない」が8名という結果だった。

③今回の授業で高校生のメールを添削してみて、自分のメールの書き方に対する自信が増しましたか？

「そう思う」が7名、「だいたいそう思う」が17名、「あまりそう思わない」が2名、「そう思わない」が0名であった。質問②と比較すると、25名の短大生が自己評価を上げた。特に、質問②で「そう思わない」と答えた8名に注目すると、2名が「そう思う」に変化し、最低ランクから最高ランクの評価に大きく変容したことがわかる。他にも、4名が「だいたいそう思う」に、2名が「あまりそう思わ

ない」に変化し、自己肯定感を強める傾向があった。

今回の交流メールの授業を通して、短大生はメールの書き方に対して自信を付けたことが明らかになった。

④OneDriveの共有ファイルをこれまで作ったことがありましたか？

「ある」と答えたのが6名、「ない」と答えたのが20名だった。今回の交流メールの授業で、初めて共有ファイルを作成した短大生が非常に多いことが明らかになった。

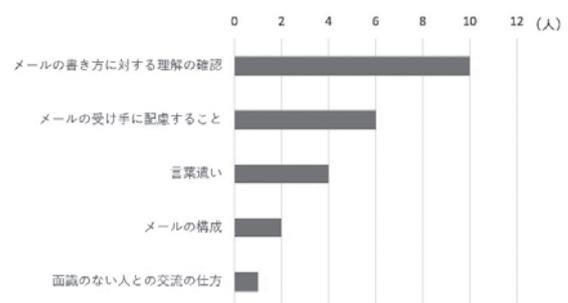
⑤高校生のメールを添削するとき、相手の立場や状況を考慮し、相手がどのように受け止めるか考えて、言葉を選ぶことができましたか？

「そう思う」が18名、「だいたいそう思う」が8名であり、「あまりそう思わない」と「そう思わない」はそれぞれ0名だった。アンケートに回答した短大生全員が言葉や表現の適否を考えることができたことと評価し、しかも最高評価（「そう思う」）をする学生が多かった。

⑥今回の交流メールを通して、学ぶことはありましたか？「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた人にお尋ねします。学んだことを思いつく限り、具体的に書いてください。

「そう思う」が16名、「だいたいそう思う」が9名、「あまりそう思わない」が1名、「そう思わない」が0名という回答結果だった。高校生の回答と酷似している。

「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した25名に対して、「学んだことを思いつく限り、具体的に書いてください」と依頼した。その回答を内容ごとに分類し（複数回答あり）、【図4】に示した。

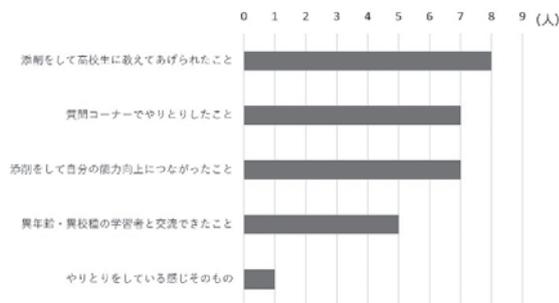


【図4】 交流メールでの学び（短大生）

⑦今回の交流メールは楽しかったですか？「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた人にお尋ねします。特に楽しかったことはどのようなことですか？

「そう思う」が16名、「だいたいそう思う」が8名、「あまりそう思わない」が2名だった。約92%が交流メールの

授業に楽しく参加できたことが明らかになった。特に楽しかったこととして短大生が挙げた回答を内容ごとに分類し(複数回答あり)、『図5』に示した。高校生同様に「質問コーナーのやりとり」を挙げる短大生もいたが、それよりも「添削」に関する楽しさの方が多く挙げた。



【図5】 交流メールで特に楽しかったこと (短大生)

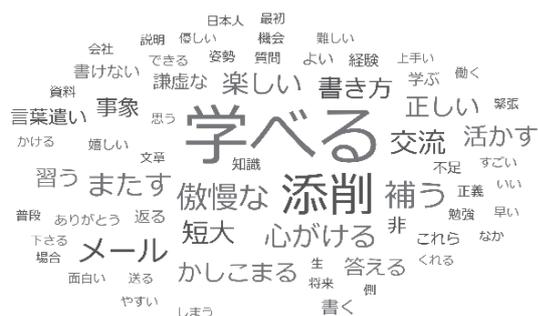
⑧交流メールの授業をまたやってみたいですか？

高校生同様、回答者全員が「そう思う」と答えた。すべての学生が交流メールに学習価値を見出したことが明らかになった。

5-5 高校生の授業の感想

今回の交流メールの授業を総括的に捉えた感想を入力してもらった。27名のうち、1名が「交流メールに参加していない」と回答したので、この1名を除いた26名の回答をユーザーローカルAIテキストマイニング(<https://textmining.userlocal.jp/>)によって分析した。志村ら(2022)は、このアプリは「データ演算処理速度も速く可視化にも優れ、メディア等でも広く使われている¹⁸⁾」と述べ、高等学校音楽科の授業における生徒の感想分析のついでにワードクラウド¹⁹⁾が用いられていた。教科は異なるが、感想分析に近似性があるため、本研究に採用することにした。

【図6】は高校生26人分の感想のワードクラウド(スコア順)である。スコアは、文章の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表し、出現頻度も考慮される。



【図6】 高校生の感想分析 (スコア順)

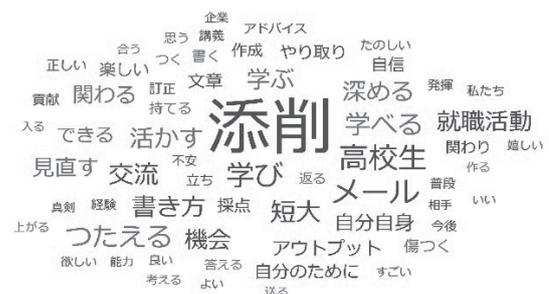
最も目立つ言葉が「学べる」、次に「添削」、「書き方」、「正しい」、知識を「補う」といった言葉も強調されている。他方で、出現頻度が最も大きかったのは「楽しい」であった。ワードクラウドでは、「またす」(またしたい)や「心かける」「活かす」というポジティブな感情を表す言葉も目立っている。これらのことから、楽しかったという大きな感情をベースに、そこからポジティブな感情が派生しながらも、短大生の添削による学びを実感した高校生が多かったと推測できる。

「傲慢な」という言葉も大きく表示されているが、これはある生徒の「少し傲慢さが出てしまうような文章になってしまい、添削されました。だから、自分が正義だからと言って傲慢にならずに、日本人らしく、謙虚な姿勢を心がけていくべきなのだと学びました」(下線は筆者)という感想に由来する。「自分が正義だからと言って傲慢にならず」というの、メール課題で入学者選抜要項の3ページ目が抜けるという明らかな大学側の不備に対して、問い合わせる側が正義を振りかざし傲慢な言葉遣いにならないようにしたいということだろう。「謙虚な姿勢を心がけていくべき」と、メールの書き方の正誤ではなく、適否について考えることができた高校生の存在に注目したい。

また、「もっと早くにやりたかったなと思いました」という感想を書いた高校生もあった。この生徒は、授業後アンケートの質問①「交流メールの授業までに、問い合わせや依頼の電子メールを実際に書いて送信したことはありますか?」という問いに「ない」と答えており、実際にメールを書いた経験はなかったと考えられる。それでも「もっと早くにやりたかった」という感想を持つということは、交流メールの授業が自身にとって必要だったと考え、その価値を強く実感したのではないかと推測する。

5-6 短大生の授業の感想

短大生24名分(26名中2名未回答)の感想を、高校生同様にテキストマイニングした。【図7】にワードクラウド(スコア順)を示す。



【図7】 短大生の感想分析 (スコア順)

「添削」という言葉が最も目立っているが、スコアだけ

でなく出現頻度も4位（感想に補助的によく使われる「メール」「高校生」を除くと2位）と高かった。「添削」という行為から得られた学びを実感する短大生が多かったことがわかる。

少数派ではあるが、注目したい短大生の感想には「自分が高校生の時もこういう経験をしたかった」、「思っていたよりも高校生がしっかりかけていてすごいと思った」というように、自身の高校時代を振り返る内容があった。交流メールの授業を通して、高校時代にメールの書き方を学ぶ意義を短大生自身が見出したと言える。また、「相手がより傷つかない文の書き方を自分も考えて相手にもつたえて、という作業がアウトプットもできてすごくいい機会だった」という感想があった。これは短大生がまず大学職員という異なる立場・状況にいる人との意味のすり合わせを行い、そこで出した自分なりの考えをアウトプットして、いかに高校生に伝えるか考えたことに対して価値を見出したことを示唆している。

6 考察

6-1 高校生（添削を受ける側）の学び

5-1より、高校生は、形式面でもメールの受け手への配慮・表現の適否の面でも課題があった。

形式面の課題は、5-3の質問①「交流メールの授業までに、問い合わせや依頼の電子メールを実際に書いて送信したことはありますか？」で明らかになったように、ほとんどの生徒が実際にメールを送った経験がないことが原因であると考えられる。高校生が普段使用しているSNSツールでは、ショートメッセージを送信することが多いと考えられ、まとまった文章量があるときの書き方を知らない。このような現状に照らし合わせると、メール作成技術を身につけるためには実際に書いてみる必要がある。国語科教科書に掲載されているメールの書き方を読むだけではなく、実際にメールを書き、どこに問題があるか個別・具体的に指摘された方が当然理解しやすいだろう。

5-3の質問②「短大生の添削から学ぶことはありましたか？学んだことを思いつく限り、具体的に書いてください」において2番目に多かったのが「メールの構成」（8人）である。これは、どのような順序でメールを書くべきかという形式面の学びである。同じく形式面では、段落を作ったりスペースで区切ったりする「読みやすいメールの書き方」（5人）を学んだという意見があった。高校生がこれまでメールを書いた経験がほとんどないことを考えると、このような形式的な学びを実感した人数が多いことに納得がいく。

ところが、質問②で最も多かったのは「言葉遣い」（15人）だった。高校生のアンケートの表記が「言葉遣い」と

なっているので、これ以上分類できなかったが、質問②で「メールの受け手の配慮すること」と答えた高校生の7人いたことから、おそらく敬語の使い方やマナーといった単純なものだけでなく、メールの受け手に配慮する言葉遣いが含まれていると推測する。すなわち、交流メールの授業における高校生の学びは、形式面はもちろん、相手がどのように受け止めるか考える適否面まで発展している。感想に「自分が正義だからと言って傲慢にならず、謙虚な姿勢を心がけていくべき」と書いた生徒がいたことも表現の適否面の学びがあったことを裏付けている。

このような学びを支えたのは、やはり匿名でのやりとりを通して、楽しく、相手への親しみを持って交流できたことである。教員ではなく、少し年上の学習者からメールの書き方を指導されるという点も、高校生が素直に学びを受け入れられたことに関係していると考えられる。

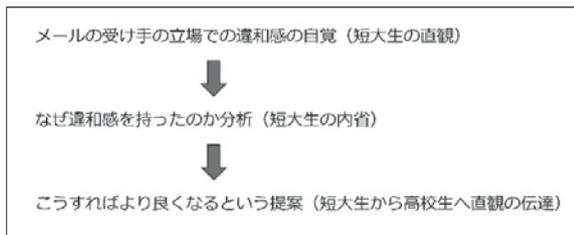
6-2 短大生（添削をする側）の学び

高校生と短大生の授業後アンケートの反応で大きく違っていたのは、交流メールの特に楽しかった点を尋ねた際に、高校生は圧倒的に「質問コーナーでのやりとり」と答えたのに対して、短大生はそれよりも、添削をして教えてあげられたことに喜びを感じたり、自分の能力の向上を実感したりしたことを多く指摘した点である。メールの書き方に対する自信も短大生の全員が高めている。交流メールの授業を通じた具体的な学びとして「メールの書き方に対する理解の確認」（5-4質問⑥）が最も多かったことにも結びつく。このように、交流メールの課題に、既習の内容など、添削する側がある程度知識を持っていることを扱うことによって、真剣に復習に取り組み、自己肯定感を高められる。

ところで、短大生が言う「メールの書き方に対する理解」とは何を指すのだろうか。メールや手紙には、当然ながら受け取る相手がいる。しかし、メールは手紙のように手書きでゆっくり文字を書くことがない。そもそもメールは、インターネット環境と端末さえあれば、いつでもどこでも発信者のタイミングで瞬時に送信できる効率の良いビジネスツールである。書き方も一般的に用件を端的に記すことが最も重視される。このようなスピード感および効率的思考がメールを受け取る相手への意識を希薄にしてしまうのではないだろうか。5-4の質問⑥を振り返ると、「メールの受け手に配慮すること」を学んだと答える学生も多かった。メールの形式的な知識を既にある程度持っていた短大生は、メールの受け手への配慮を含めた「より高次元のメールの書き方」を学習したと考えられる。

米田（2023）は、国語科学習指導要領の目標に提示される「言語感覚²⁹」および言語感覚の正誤・適否・美醜とい

う観点を取り上げ、「国語科教育における『言語感覚』の指導は、いわゆる『適否』の指導に重点をおくべきである²¹⁾」と述べた。今回の交流メールにおいて、短大生は、正誤という二項対立の判別から一歩踏み込み、適否という微妙な領域での判別の能力を磨くことができた。また、「相手がより傷つかない文の書き方を自分も考えて相手にもつたえて、という作業がアウトプットもできてすごい機会だった」という感想からは、短大生の以下のような思考の流れが推測できる（【図8】）。



【図8】短大生のメール添削の思考の流れ

米田(2022)は、言語感覚の指導プロセスは「直観(直感)→分析・考察→直観(直感)²²⁾」を経るとして、「最初の『直感(直感)』はまさに『漠然とした』直観(直観)であるが、最後の直観(直感)は「確たる」直観(直感)となる²³⁾」と説明している。短大生は、自分の中の漠然とした違和感を高校生に伝えるために分析したことで、確かな違和感として自覚した。交流メールを通して、このような思考の流れがあったことが、表現の適否という微妙な領域での判別能力の向上に寄与したと考えられる。

6-3 交流メールの可能性

平成30年告示高等学校学習指導要領解説国語編では、実用的・実務的な文章の一例として「電子メール」が取り上げられている。また、本研究を通して、学習者自らもメールを書く技術が高校卒業後の社会生活に必要であると判断していることが明らかになった。山田(2023)で実施した交流作文では、添削を受ける側の学習者の学びが分散的になってしまったことが課題だったが、今回はメールという高等学校の学習者にとって必要な文種を選定したことで、添削を受ける側の生徒が「メールの形式的な書き方の習得」という明確な能力を身につけることができた。

また、メール課題は、短大生・高校生ともに異なる立場・状況にいる者同士が意味のすり合わせを行えるものを意図的に設定した。これによって、高校生はメールの形式面だけでなく、相手がどのように受け止めるか考える適否面まで意識が及んだと考えられる。特に、短大生は表現の適否

という微妙な領域での判別能力を磨くことができた。【図8】に示した自覚的な分析という思考過程があったため、磨くことができたと考えられる。表現の正誤という二項対立の判別から一歩踏み込んだという点、単に自己の書くことの技術を振り返るだけに終わらなかった点において、交流メールは短大生により高次の学びをもたらした。

先述のように、実際のメールを使って異校種の学習者間でやりとりすることは技術的に困難である。本研究では、短大生がクラウド上に保存した共有ファイルを高校生が閲覧・編集することでメールのやりとりを擬似的に体験することができた。文部科学省のGIGAスクール構想によって、学校教育におけるICT環境が整備され、学習者一人につき1台端末を持っていることを考えると、今回のように同じ学園の学習者でなくても交流メールを行える可能性がある。非対面・匿名での交流なので、学校に登校しにくい学習者も教室にいる学習者と全く同じ学びを得られる。また、課題を工夫すれば、海外の学習者との交流も可能である。このように、交流メールは交流作文の一形態として、大きな可能性を持つ。

7 総括と今後の展望

交流メールは、高校生にはメールの形式的な書き方の習得と表現の適否に関する意識強化をもたらした。短大生は適否という微妙な領域での判別の能力を磨く能力を向上させた。初めてメールを書いた高校生にとって、単発的な交流メールでは確実に自信をつけるまでには至らなかったため、單元化し、言葉および表現の適否を考える授業を経験してから、交流メールに発展させるなど、授業展開の工夫が必要である。

8 謝辞

本研究を遂行するにあたり、ご協力いただいた星稜高等学校国語科教諭の川井有紀先生に心より感謝いたします。

金沢星稜大学教養教育部の二口聡先生には、共有ファイルをクラウド上に保存し、閲覧・編集する方法をご提案いただきました。また、金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部事務局の船木さやか氏には、交流メールの課題を検討する際、大学職員の立場でアドバイスいただきました。

川井先生、二口先生、船木氏、交流メールに参加して下さった学生・生徒の皆さんなど関係者各位に深く感謝申し上げます。

注

- (1) 交流作文とは、基本的に異なる学校・学年間で行う双方向型の作文指導法である。町田(2009)は、大学生と高校生の作文による交流において、それぞれの学習者に価値ある学びをもたらすことを示唆した。
- (2) 山田範子(2023)「国語教育における『交流作文』の価値－短大生と中学生の実践に即して－」金沢星稜大学人間科学研究第16巻第2号, p.72.
- (3) 前掲書(2), p.72.
- (4) 前掲書(2), p.72.
- (5) 前掲書(2), p.72.
- (6) 平成30年告示の学習指導要領は、2023年度において、高校2年生以下に適用されている。本研究の対象である高校3年生は、旧課程の履修者だが、高等学校国語科の新しい潮流に応じた指導が必要であると考えた。
- (7) 砂川誠司(2021)「メディア・リテラシー関連教材として実用文を捉える－SNSの利用規約を書きかえる活動の提案－」国語国文学報79巻, p.76.
- (8) 前掲書(7), p.76.
- (9) 前掲書(7), p.76.
- (10) Microsoft365は、Word, Excel, PowerPoint, OneDriveなどMicrosoft社のアプリケーションをサブスクリプション方式で利用できる。金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部では、2021年4月より、全学生・全教員にMicrosoft365のアカウントを付与している。
- (11) テキストマイニングとは、AIによって文書情報群に含まれているある傾向や相関関係などを発見する技術のことである。本研究では、ユーザーローカルAIテキストマイニング(<https://textmining.userlocal.jp/>)を用いた。
- (12) OneDriveとは、Microsoft社が提供するオンラインストレージサービスである。オンラインストレージサービスでは、ファイルやフォルダーをインターネット(クラウド)上に保管することができ、クラウド上でファイルやフォルダーの作成・保存・共有ができる。
- (13) 高校生が実際に使用したペンネームが本名との関連性が高いと判断したため、本論文にするにあたり、高校生Aとした。
- (14) 共有ファイルだけでなく、クラウドでやりとりする前の予備的検討での出現も含む。
- (15) 共有ファイルだけでなく、クラウドでやりとりする前の予備的検討での出現も含む。
- (16) 日本語表現法Iは、筆者が担当する科目で、短大部1年次前期に開講している必修科目である。交流メールに参加した短大生のすべてが日本語表現法Iを履修済である。
- (17) 流星祭とは、金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部が合同で行っている学園祭のことである。
- (18) 志村泉・山口星香・小野貴史(2022)「音楽鑑賞教育における自由記述文による知覚・感受側面の分析－テキストマイニングツールを活用した鑑賞授業の実践をもとに－」信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』No.21, p.35.
- (19) ワードクラウドとは、文章を解析し画像に落とし込む技術を指す。
- (20) 平成29年告示の小学校学習指導要領解説国語編によると、言語感覚とは、言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のことである。
- (21) 米田猛(2023)『国語科授業の実践的考究』溪水社, p.270.
- (22) 米田猛(2022)『『言語感覚』の育成』山室和也・浅田孝紀・米田猛・松崎史周(2022)『『言語感覚』育成のこれから』全国大学国語教育学会国語科教育研究第143回千葉大会(対面開催)研究発表要旨集, p.293.
- (23) 前掲書(22), p.293.

参考文献

- 米田猛(2022)『『言語感覚』の育成』山室和也・浅田孝紀・米田猛・松崎史周(2022)『『言語感覚』育成のこれから』全国大学国語教育学会国語科教育研究第143回千葉大会(対面開催)研究発表要旨集, p.293.
- 米田猛(2023)『国語科授業の実践的考究』溪水社.
- 志村泉・山口星香・小野貴史(2022)「音楽鑑賞教育における自由記述文による知覚・感受側面の分析－テキストマイニングツールを活用した鑑賞授業の実践をもとに－」信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』No.21, pp.31-40.
- 砂川誠司(2021)「メディア・リテラシー関連教材として実用文を捉える－SNSの利用規約を書きかえる活動の提案－」国語国文学報79巻, pp.76-65.
- 町田守弘(2009)『国語科の教材・授業開発論－魅力ある言語活動のイノベーション』東洋館出版社.
- 山田範子(2023)「国語教育における『交流作文』の価値－短大生と中学生の実践に即して－」金沢星稜大学人間科学研究第16巻第2号, pp.63-72.